

第2回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

(1) 前回会議の振り返り

(2) 議長による講義

「生涯学習・社会教育のこれから ー第1回社会教育委員会議を踏まえてー」

(3) 協議事項

令和7年度協議テーマ「第4次札幌市生涯学習推進構想に向けて」

第2回熟議テーマ「生涯学習の成果発揮のため、必要な環境について」

(4) 連絡事項

2 日時

令和7年(2025年)11月20日 (木) 15時00分～17時15分

3 場所

S T V北2条ビル4階 教育委員会 委員会会議室

4 出席者

(1) 委員 (出席10名)

齋藤委員、高原委員、今泉委員、桑原委員、
榎委員、細川委員、片岡委員、出口委員

(2) 事務局 (8名)

井上総務部長、新津生涯学習推進課長、
早坂生涯学習係長、上原社会教育担当係長
大山職員、荒木職員、橋本職員、野上職員

5 開催形態

公開 (マスコミ関係者: 北海道通信社1名)

6 会議内容

【配布資料】資料1：第1回社会教育委員会議 議事要旨

資料2：生涯学習施設について

資料3-1：講義資料「生涯学習・社会教育のこれから」

資料3-2：参考資料「学校・地域の問題解決の視点」

資料4：第3回社会教育委員会議 予定

(1) 出口議長挨拶

(2) 前回会議の振り返り

ア 事務局より、前回会議の振り返りとして資料1 「第1回社会教育委員会議 議事

要旨」を用いて説明。また、前回会議での協議の際、本市所管の一部施設の役割に関して委員から質問があったため、資料2「生涯学習施設について」を用いて説明。

以下、説明の要旨

- ・第1回会議における熟議内容の要旨
- ・生涯学習センター、月寒公民館、区民（コミュニティ・地区）センターの3種における所管業務や役割等の違いについて

イ 主な質疑応答・意見

- ・施設の目的や役割を整理していただきてよく理解できた。現状においてはこれらの目的や役割を、施設職員を始めとする関係者が十分に理解しているかどうかが非常に大きな問題だと思う。同じ目的をもつ施設でありながら所管部局が異なるところであるが、横断的な会議・職員養成のような横の連携を行っているのだろうか。

（出口議長）

⇒横の連携による会議は実施していないが、職員養成については、生涯学習センターが主催し職員研修という形式で、コミュニティ施設、区民センターや公民館の職員を対象とし毎年実施しているところ。効果としては、議長からご指摘いただいた内容含め、今後どう深めていくかという部分を検討していきたい。

（早坂係長）

⇒横の連携や職員養成については大きな課題だと思う。（出口議長）

- ・貸室の空き状況の確認について、各地区センターや区民センターのHPを逐一直接確認しなければならず、検索し直すにも「他には近隣にどのような施設があるのか」を確認しなければならないため、関連施設を一括して検索できるようなシステムがあると利便性が向上するように感じた。（齋藤委員）

- ・2点確認したい。まず、資料中では生涯学習センターを生涯学習施設、月寒公民館を社会教育施設と記載しているが、これらを区別するにあたりどのように定義づけているかを確認したい。次に、生涯学習センターに専門職員が配置されていることは存じ上げているが、それ以外の区民センターや月寒公民館等（地区会館や市民集会施設を除く）において、生涯学習の専門職員即ち学習支援者としての職員の配置はどのように行われているのか確認したい。（細川委員）

⇒生涯学習施設と社会教育施設の区別については、法律・条例上の記載を引用したもの。2点目について、コミュニティ施設の詳細は把握していないが、これらの施設や月寒公民館は、主に地域の方々を中心とする組織を指定管理者としているため、専門職は配置していないものと思われる。（早坂係長）

⇒市の生涯学習の普及振興を図る施設として条例に記載されているということでありますので、専門職員の配置はぜひお願いしたい。（細川委員）

- ・市民集会施設の設置主体が地元と記載されているが、どのようなイメージなのか。

（高原委員）

⇒これは自主運営を行う町内会自身が設置主体というイメージになる。

（早坂係長）

- ・指定管理者に関する話が出ていたが、具体的にはどのような団体が担うのか。

（今泉委員）

⇒生涯学習センターについては、札幌市生涯学習振興財団という本市の出資により設置した法人が担っている。コミュニティ施設については詳細を把握していないが、連合町内会役員の方々等を中心に構成された組織であり、月寒公民館については、月寒地域の連合町内会役員や当該地域商店街の方々を中心とし構成された組織によって担われている。（早坂係長）

⇒地区センターや公民館といった施設の完成に際して、町内会の方々等が指定管理者となるために団体を立ち上げる流れなのだろうか。（今泉委員）

⇒施設が完成して最初は市が直営するが、ある程度期間が経過したタイミングで地域の方々に管理をお願いするような流れかと思う。（早坂係長）

⇒区民センターもそうなのだろうか。（今泉委員）

⇒区民センターも同様。町内会役員の方々や各区社会福祉協議会の方々にて構成される区民センター運営委員会が指定管理者を担っている。（新津課長）

・指定管理者にどういう条件で管理を任せるかが恐らく重要。例えば、社会教育士という制度を活用して、その称号をもつ方を入れて学習支援者に充ててもらうという手法もあるかと思う（出口議長）。

・もちろん社会教育主事・社会教育士といった専門職を配置することは重要かと思うが、ただ配置すればいいというものではないとも思う。施設を運営するにあたりコミュニティを巻き込んでいくという意味では、そういった資格や称号を有しない人も含めて、自発的に地域の方々に学んでもらうための方策を行政がどう考えるのか、これが社会教育法上の第一義であるため、ただ専門職が地域の方々に教えるだけでは却って法の精神に則らないこととなってしまう。そのため、仕組みや運用面をどう構築するか、ボトムアップを促進するためにどのような配置が適切か、という部分が重要なってくると思う。（片岡副議長）

（3）議長による講義

「生涯学習・社会教育のこれから　－第1回社会教育委員会議を踏まえて－」

出口議長より、資料3－1及び3－2を用いて、社会教育の源流と歴史を辿り、教育の出発点が社会性の習得にあり、生涯学習は「人のつながりをつくる教育」という捉えから、現代の課題についてご講義いただいた。また、今後の協議に向けて、前回会議を踏まえた本市の課題を整理し、学校と地域の協働による循環型の学びの仕組みづくりの検討が提案された。

（4）協議事項「第4次札幌市生涯学習推進構想に向けて」について

○熟議

今回も2グループに分かれて、熟議を行う。最後に熟議の内容を各グループでまとめた上で発表し、全体で共有する。（出口議長）

（ア）グループ構成

- ・出口議長、桑原委員、齋藤委員、細川委員
- ・片岡副議長、今泉委員、榎委員、高原委員

（イ）熟議テーマ

「生涯学習の成果発揮のため、必要な環境について」

→市民が、学んだ知識やスキルを実際の場面でどう活かしていくのか。今後生涯学習推進構想を考えていく中で、どのような環境があれば、学習した成果の発揮につながっていくのか。行政として、どのような「支援の仕組み」や「活動の場づくり」が求められるのか等の様々な視点から協議すること。

(5) 協議事項（熟議概要）

ア 出口議長班

- ・NPO活動を行うきっかけは何なのだろうか。特定の分野に興味関心があって、そこにある課題を解決するためなのだろうか。（出口議長）
- ・活動によって自分達が生きやすい社会にする、皆が生活しやすくなる、というものは動機の一部だと思う。課題解決の側面もある。（齋藤委員）
- ・既存のNPOへの参加でも新規の立ち上げでも、NPO活動を始めるきっかけを考えることが、学習者の成果発揮を考える切り口になると思う。（出口議長）
- ・自分はNPOを立ち上げた身であるが、正に課題に直面し、それを解決することがきっかけであった。（桑原委員）
- ・同志が集まり、共に同じ悩みの下で一つの目標に進んでいくこともあると思う。自分の同志が集まる居場所を求めるということはないだろうか。（出口議長）
- ・一人ではできないことだと思い、仲間を集めたいと思った。そして結果的に自分にとっての居場所になったと思う。（桑原委員）
- ・知的好奇心という点で考えると、興味のある内容を皆で学習することで人が集まり、同じような考え方をもっているからコミュニティが出来上がる。（齋藤委員）
- ・このような課題解決は行政が対応できないところかと思う。（出口議長）
- ・同様の集まりを見つけられなかつたため、自ら立ち上げた。（桑原委員）
- ・NPOを立ち上げるために必要なもの、すべきこととは何だろうか。（出口議長）
- ・仲間を見つけることだと思う。自分は不登校児童の支援をする団体を立ち上げたが、まず自分も困っているという人が集まってきて、次にその対策を考えた時に、協力を得られそうな役職の方や学校とつながったり、地域における学校以外の場所で支援を得られそうな人とつながっていくなど、課題から仲間を広げていく動きであった。（桑原委員）
- ・課題からつながるために、その課題を共有する必要があると思う。その共有の場も、同じく課題からつながって生まれたものなのだろうか。（出口議長）
- ・自分たちと同様に不登校児童の支援をする道内、全国の他の団体とつながり共有している。（桑原委員）
- ・この状況のように、何かに興味をもつためにはどういう機会があればいいのだろうか。（出口議長）
- ・当事者が一人で悩むのではなく、誰かに相談する、当事者同士で悩みを共有するところから始まるのではないかと思う。（細川委員）
- ・自分は、実際に子どもが不登校になった時に、それを友達や知り合いに相談していく中で、不登校の子が集まる場所がないということに気づいた。そこで、小さくても話ができる場所を作ろうと思いSNSに投稿すると、同じ悩みをもつ人が集まってきて少しずつ共感するメンバーの輪が大きくなっていた。その結果、今の団体が生まれたため、自分から発することが大きなきっかけになったと思う。（桑原委員）
- ・行動力がある人はそのように動けるが、一人では迷ってしまう人、団体を作るような行動力がない人は、発信された情報をキャッチして動くことになると思うの

で、SNSや市の広報も含めた様々な形で情報を得るというのは大事だと思う。

(細川委員)

・自分は、未就園児ぐらいの小さな子どもを連れて参加できる英語サークルを運営している。これまでに学習してきた英会話を続けたくても、小さな子どもを連れて参加できる場所がなかったため、自分で立ち上げたのが始まりであった。今では同じように悩みを抱えていた保護者の方々が集まってくれている。SNSで発信したことに加え、区の子育て支援課で子育てサークルとして承認を得られたことで、子の定期検診等で訪れる場所の掲示板に紹介チラシを張り出すことができ、それを見て参加してくれる方もいた。不登校のような問題も、悩みを抱える人含め皆が行く場所に、自ずと目に映る何かがあれば、見つけてもらえることも増えると思う。

(齋藤委員)

・ボランティア活動は場を提供することである程度機能していくが、NPO活動は自らゼロベースで考えないと難しい。ただ、学んだ成果を生かしてもらいたいとも思うため、そこにつなげるには何が必要なのかと思うところ。 (出口議長)

・不登校という観点でいうと、自分は直面していないため、どのような課題があるのか分からぬ。ただ、自分の子が不登校になった時に、実際に相談するのは周りにいる他の保護者かもしれないと考えると、口コミのような情報が大きい影響力を持つと思う。 (齋藤委員)

・SNSや市の広報に反応する人は、余程深刻な悩みがある人か興味のある人である印象。撒いたチラシを見て来る方は熱心で、行き違いを起こしてしまうことも多く、誘ったときに謙遜する方が意外と丁度いい距離感でボランティアになるという話を聞く。NPO活動はボランティア活動とは異なる部分もあるが、もっと様々な形で発信し、意欲のある人や問題意識をもつ人により関わっていけば、その人達のやりがいや居場所づくりになっていくと思う。 (出口議長)

・7月に、北方領土に関する全国の青年団と婦人会の研修集会が行われ、北海道からは自分含め4人参加し、集会後に啓発活動として報告会を開催した。自分が立ち上げた、社会教育の情報を皆で共有し仲間を作るという「クラウド公民館」の主催にて実施した。学生を始めとする若年層に参加してもらい、平和や北方領土に関する議論するつもりでいたが、高知県の青年団以外の若者の参加が少なく、会場参加9人オオンライン参加6人となった。テーマを重く、難しく感じて行きたがらない人もいた。今年は終戦80年ということもあり平和への関心が高まっていることから、SNS等での情報発信や、自身の講義で学生に周知もしたが、予想に反して参加者を集めるのは難しかった。 (細川委員)

・自分にとって身近な問題ではないとそこに対してアプローチしようと思わない。どうしても時間を使ってしまうというイメージが強い。本当は自分にも身近なことであり、それを知ることによるメリットが伝わらないと難しい。 (齋藤委員)

・発信の仕方や工夫として、楽しそう、魅力的だと思ってもらえるような仕掛けが必要だったと感じている。 (細川委員)

・そういったことに興味がない人はいないと思うが、もう少し時間的余裕がある時にしたいという方が多いように感じる。NPO設立のように、ゼロから行動を起こすことが凄いと言われがちであるが、本当は各々課題を抱いていて、各々がそれらに対して発揮できることも沢山あると思う。世間のサポートを待っていたり、自分から行動を起こすことに慣れていない人が多いように感じる。もっと気軽に課題を共有できる場、茶話会のような場があるといいと思う。 (桑原委員)

・昨年、先程の「クラウド公民館」で、対面とオンラインのハイブリッド方式を用いて2時間自己紹介をし、互いに質問をし合うだけの交流会を毎月実施していた。

人数は多くなかったが意外と面白く、参加者がこれまでやってきたこと、今考えていること、これからやりたいこと等を共有できた。そのようなきっかけが、一緒に何かをするということにつながるのだろうと思う。（細川委員）

- ・次の段階に進むためのコーディネートが必要だと思う。（出口議長）
- ・そう思う。今年は全国集会等多忙であったため、目立った活動ができず開店休業状態だったこともあり、人が集まらなかつたこともあると思う。（細川委員）
- ・生涯学習という言葉の意味を考えると、さっぽろ市民カレッジを受講するようなお年寄りをイメージしがちだが、一生涯における話なので、大学で身に付けたままの専門性を生かすことも立派な成果の発揮だと思う。そう考えると、社会のために動くことは誰にとっても成果を生かしていることになると思う。（出口議長）
- ・大学で学んだことを、生かしたくても生かせていない人は多いと思う。

（細川委員）

- ・大学の専攻と関係のない職業に就く人もいる。（出口議長）
- ・実際の活動にどうつなげていけばよいのだろうか。齋藤委員が仰ったように、不登校のように当事者でないと自分ごととして考えにくい問題や、拉致家族のような大事でこそあるものの、今何ができるかと考えるとどうしようもなくなってしまう問題もある。やはり自分に関係する事柄や興味、関心、好奇心のあることにしか中々動けない。（出口議長）
- ・物事に対する必死さや、行動力につながるところも違ってくる。（桑原委員）
- ・なし崩しに生きている人も多く、学んで成果を生かす段階までつながらないのかもしれない。（出口議長）
- ・今回の出口議長の講義ともつながるが、最近、他人のためということを考えられない人が増えているように強く感じている。そこから外に目を向けられるようにしていくのが社会教育だと思うが、押し付けるものになってはいけないとも思う。まずは自分の興味関心から始まり、社会にもう少し関心をもってもらう。そして、自分一人ではなく皆で解決しようと考えNPO設立のように活動を起こしていく。

（細川委員）

- ・社会教育とは関係のない同年代の人達と、PTA活動の形骸化やその活性化について話した際、PTA活動をして何になるのか、何が子どものメリットになるのか、というような言い方をされたことがある。その時、そこには学校全体の子どもたちのために何かをするという考えがないということに気付き、それ以上何も言えなくなってしまった。（出口議長）
- ・タイプと言われる時代もあるため、これからはそういう人達がますます増えてくると思う。（齋藤委員）
- ・メリット、デメリットという話をされてしまうと、それではPTAの活動とはそもそも何なのかという話になってしまう。（出口議長）
- ・PTA会長を務めているが、会費を負担に感じる家庭がいる中でどのようにして入会してもらうかを大きな課題と感じている。一人ではできないことでも、その学校の保護者という大きな存在になった時にできることは凄く多い。目には見えなくても、安全確保や誰かとつながっている安心感、困った時に相談できる人との関係性がある。ただ、それは実感した人しかわからない価値でもあるため、それを知らない人にどう伝えていいか凄く悩んでいる。来期、新一年生の保護者にどう説明するかが悩みの種である。（桑原委員）

- ・個人主義が強くなりすぎたのかもしれない。災害時の学校の泥出しのような共通の課題や、子どもにとっていい環境を作ろうという共通の目的があれば協力し合うと思うが、それを見出せないだろうか。例えば「体験活動によって子どもたちがこ

う変わるから大事なんだ、だからみんなで場を作ろう」というように動けばいいと思う。PTA活動は決まった活動が多く、仕方なく協力し合う状況が続いている。体験活動の例でいえば、子どもたちの感想を親が聞いたら、「こんなにいいことがあって良かった」と親も感じることができる。これは自分の子どもにどんなメリットがあるのかというところにもつながると思う。何でもいいから社会貢献したいという声は多いのだが、やらない人が多い。国の世論調査では、必ず2/3程度はボランティア活動をしてみたいと回答があるのだが、いざとなるとやらない。それは何故なのか疑問だが、きっかけさえあれば動くということなのかもしれない。災害時にボランティアで学校に来る人は熱意のある人が多く、手弁当でも来ることが多いが、度々それ違いも起きてしまっている。（出口議長）

・そういう方々は元々熱意のある方なのか、何かきっかけがあって活動に取組むのだろうか。（齋藤委員）

・災害ボランティアセンターの経営を通じて、災害ボランティアが活動しやすい環境をどのように作るのかということを研究していた時に実感したことであるが、一度被災した人は、その時に助けてもらった経験があるため、その恩返しの気持ちで行く人ももちろんいる。自ら出向く人たちは、自身の存在意義であったり、人の役に立つことを目的にしているように思う。（出口議長）

・社会教育士の学びの際、小さい時に誰かに助けられた経験のある人は、同じことができるようになると聞いたことがある。今は祖父母と過ごすことや、地域の人との交流が少ない子どもたちが多い。保育園で大人と関わってはいるが、そこには対価が存在するため意味合いが異なると思う。恩の受け渡しのような、気持ちの交換が少ないとためにこのような状況が生まれているように感じる。（桑原委員）

・地域学校協働活動がもっと広がって、各校で活動が行われるといいと思う。自分達のために地域の人たちが汗をかいてくれているということを、子どもたちが理解して育つていけば、彼らが大人になった時、同じように取組もうという気になるのではないかと期待している。（出口議長）

・伝統的なお祭り等の行事は、子どもたちが小さい時に経験したことで憧れて、大人になっても続していく文化だと思う。（桑原委員）

・そう考えると、いかに子どもの時に色々な体験をさせるかが大事になる。

（出口議長）

・だから子ども向けのリーダー養成事業を行っている自治体が多い。（細川委員）

・自分が日本語支援を外国人にするようになったのは、自分自身が保育園児の時に、ブラジルの子と関わったことで言葉の分からぬ世界を知ったのがきっかけであった。小学校の頃は、近くの老人ホームから年に1回、ご年配の方々をお招きして歌を披露する集会があった。そういう機会がないと年配の方とつながりをもてない世代だったため、関東大震災の話を聞いて学んだりできたことは、いざ大人になると、年配の方とお話しする時のきっかけになった。やはり子どもの時の経験は大きいように改めて感じた。（齋藤委員）

・前期の社会教育委員会議のテーマの一つが青少年の体験活動に関するもので、その時に話したのは、学校が体験の場を設定するのも一つだが、親が体験の場を設定するかどうかも大事ということであった。子どもが自ら山や釣りに行くことは少ないが、親が連れていくかどうかで子どもの体験は大きく違ってくると思う。大谷翔平氏ですら、父親がきっかけで野球を始め大成している。そう考えると親へのアプローチが大事になってくると感じる。自分の経験を我が子にも伝えたいと考える大人に、どのように体験活動に触れさせるのかが大事だという話になっていた。

（出口議長）

・子どものためになるということを知れば、動いてくれると思う。子育てに力を入れたいと思う親は多いと思うので、その活動がどう生きるのかが伝われば、多少自分の苦手なことでもやってみようと思うのではないか。（齋藤委員）

・子どもが社会や人のためになることをしようと思える方向に、親が熱心に接してくれるといい。子どもが社会性を身に付けたり、人の役に立つことができるようになるような魅力があるって、親が行かせたいと思えるような活動があるといいと思う。参加した子どもがそこから育っていくような循環になると良いと思う。

（細川委員）

・個人的には、それが行き過ぎると善の搾取となってしまうイメージを抱く。善人に育つけれども、果たして本当に自立して生活していくために必要なものを身につけられているのか、必要以上に自分を犠牲にしてしまう人間にならないか、という感じがする。そういう精神があるからこそ、社会を変える意思をもつ人間になれるということにつながればいいが、必ずしもそうではないと思う。津波の際、子どもが地域の高齢者の避難を補助する想定をした訓練が物議を醸したように、子どもに経験させる意味がしっかり伝わらないといけないよう感じた。（齋藤委員）

・いろんな大人と接することによって、それを見極めていく資質も育っていくと思う。（出口議長）

・「釜石の奇跡」が有名だが、訓練は年1回しかしていなかったとのこと。年に1回だけでも、何処に逃げるのかを皆で確かめ合って、その場所まで連れて行ってという練習を続けていた。だからあの津波の時に地域の高齢者も含めて「ここにいたら津波が来るよ」と声をかけたのは、恐らく子どもたちの判断なのではないだろうか。だから決して子どもたちが高齢者を連れて行ったりということまではしていなかったのだと思う。（出口議長）

・そう考えると、SNSはやはり悪い情報だけが拡散されていたのかもしれない。（齋藤委員）

・本で読んだ中には、ただ津波が来たら危ないということだけを徹底的に頭の中に教え込まれたと書いてあった。やはり最終的には自分で判断するのではないだろうか。（出口議長）

・そのために、色々な人に出会うことが大切だと思う。だが、学校に社会人や専門知識をもつ人が来ると、子どもたちはいい子で聞くようしつけられた状態で交流するため、お互い共に生きる人として交流できる場が必要だと思う。学校教育の一部ではなく、社会教育の中に子どもがいる状態を作りたいと思う。普段から当たり前にいる人や先生を始め、色々な人と関われる機会を作れるといいと思う。

（桑原委員）

・地域で子どもを育てる環境として、習志野の小学校の話をすると、子どもたちの減少で生まれた空き教室を公民館代わりに使うことで、地域の人たちは日頃公民館活動をするようになった。昼間は子どもたちも自由に遊び、埋立地であり非常に広いグラウンドでは、地域の人々がビオトープやウサギ小屋を作るような環境であったが、そこで育った子どもたちの不登校はゼロということであった。やはり子どもたちと地域との関係がとても良くできているということになる。だから、最終的には地域や大人の中で子どもが育つような関係性を目標に地域学校協働活動を広めていこうということになる。知らない人が来ると学校が危ないという人がいるが、誰だって1回目は知らない人でも、2回目からは知った人になる。（出口議長）

・自分が今やっている活動としては、学校の一室を目的外使用という形で、地域交流の目的で借り、不登校の子が来てもいい場所として無料で開放している。また、学校の校区だけでなく色々な地域からも来られるようにしている。子どもたちを見

てくれる人として町内会の人を呼んで来てもらったり、お昼ご飯を作ってもらっている他、大学生ボランティアともつながり、いつも色々な大人達がいる状態となっている。そういう場所が学校の中にあることが良いことだと思っている。学校が、その地域に住む子どもたちしか行けない場所であるのはもったいないように感じており、このような形で学校が開かれ、地域の誰でも行っていい活動の場、公民館のようになってもいいと考えている。（桑原委員）

・安平町の学校も同じような状況で、家庭科室や特別教室を自由に地域の人が使えるようになっている。顔認証を活用して地域の人たちが子どもたちの教室には入れないようにしているが、子どもたちは大人のいる特別教室に入れるという整備を行っている。（出口議長）

・自分はスポーツ活動の取材で行ったため、一部しか見ることはできていないが、学校図書館が地域の図書館として開放されていた。（細川委員）

・公民館と学校が併設され、それぞれの予算や補助金で整備し行き来できるようになる形式自体は昔からあるが、安平町の例は面白いと思う。顔認証まで導入しており凄いなと感じた。学校と公民館が混ざり合うとあのような形になると思う。

（出口議長）

・そのような形式をとることで、学校の先生の負担になるのではないかということをいつも考えさせられる。（齋藤委員）

・何か変化があると先生の負担が増えるというイメージだが、実際は先生の負担を減らすためにやっていることもある。（細川委員）

・習志野の例で言うと、公民館利用の教室は地域が運営している。（出口議長）

イ 片岡副議長班

・成果の発揮ということは、やはり人とのつながりができるにつながっていくのだろうか。（今泉委員）

・英語の学習でいうと、学んだものを生かすために札幌国際プラザのような場、暗唱大会のような成果を発表する場があれば良いのかもしれない。（片岡副議長）

・生涯学習によって何を学ぶかという中身によると思う。抽象度の高い議題であるが、循環型の生涯学習社会のようなことがイメージされる。（榎委員）

・成果発表の機会を設けるという点では、先程例に出した英語の暗唱大会等があり得ると思う。学びをつなぐという意味でいうと、仮に英検二級を取得した方がいたとして、更にその先のノウハウを伝える目的で、一級を取得した方がマイスターのような立ち位置で二級の方に教えるというようなイメージ。（片岡副議長）

・マイスター制度という視点だと、元々の受講者が講師になることもある。ちえりあでは実際に「ご近所先生企画講座」というものも行われており、先生ではない人でも趣味や特技を教えることができるという点は、ある意味、成果発揮の場になるのだと思う。（高原委員）

・学びへのモチベーションが重要。自分が役立っている実感、他者の学びに自分が貢献できる喜びのような感情的なものが大切だと思う。個人化された学びを使い他者のために生きられることは凄くありがたいことであるため、他者のために生きたいと思える、他者に貢献できる喜びを実感できるような仕組みが重要になる。

（榎委員）

・函館の遺愛女子高校の英語科では、生徒が英語で観光客へのボランティアや通訳を行っている。そうすると、自分で学んできた英語が誰かのためになるとともに、自分の経験値として返ってきて、それを繰り返すことで伝統のようになっていく。そのような取組が札幌市でもあればいいのかもしれない。生き生きと活動する先輩

を、誰かのためでもあり、自分のためにもなるという意味でロールモデルのように捉えていく。誰かのためだけに活動すると言うと、厳しいところが出てくると思う。（片岡副議長）

・自身のロールモデルはむくどりホーム・ふれあいの会の代表であった柴川明子氏などが挙げられるが、他者のために生きることが自分の喜びという嬉しいエネルギーを感じる。そういう部分が生涯学習の醍醐味なのかと思う。（榎委員）

・「自立した札幌人」というのは、誰かと助け合い学び合っていく流れが前提にあると思う。最初から完全に自立、というのも困ってしまうと思う。（片岡副議長）

・自立するための前提条件が、社会教育の裾野にあるように思う。誰とも触れ合わず自立することはできないと思うが、人々と交流した結果、自立することはあり得ると思われる。（榎委員）

・成果発表の機会というと、例えば手作りの物で他者との競争、他者に見せる、売って生計を立てる等が思い浮かぶが、それらは承認欲求の充足や自己肯定感の獲得のようなモチベーションの維持につながると思う。また、役に立つという点でいうと、そのモチベーションの方向が自分のベクトル、もしくは他者のベクトルの二つに分かれしていくと思う。ずっと学び続けていきたいと思えるモチベーションが維持できるような環境が必要と考えられる。また、生涯学習が人のつながりや地域のネットワークを作るものだと捉えると、その成果の発揮を考えた際には、また別の環境が必要になってくるのかもしれない。（今泉委員）

・英検のようなある分野を学ぶ過程であったり、何かのきっかけでつながった人と、カフェで話したりすることがあると思うが、当初の学びたいことに限らず、別の分野でのつながりに派生していくこともあり得る。英語を学ぶ中で知り合ったけれども、今度は料理の作り方を教え合う方向に派生していくような、当人が大事にしたいもので共感した時に少し深く学べると、楽しいこともあるのではないだろうか。（片岡副議長）

・そういう意味で言うと、多種多様なコミュニティの整備により、何らかのコミュニティに属することで、より学びを得ることができるのだと思う。自分もPTAに関わる中で、本当に非常に大きな学びを得ていると思っている。今の自分の立場は非常に貴重な経験をさせていただけるものだと感じており、誰しもがそういう役割を担うことができる機会は、コミュニティの増加に伴い増えていくと思う。そういう機会を作ることに加え、今の自分のような立場をどんどん新しい人にやっていただいて、そういう機会を皆さんのが得られるということが非常に重要。（高原委員）

・今泉委員のモチベーションの話に関連して、役に立つという点において自分と他者に方向性が分かれるという話であった。他者は自分の鏡ともいえるため、他人事社会ではなく、他人の事は自分事というふうに認識の枠組みが変われば、自分を取り巻く世界が少しずつ広がっていくと思うので、そのような社会をどう作っていくのかということが大切だと感じる。（榎委員）

・自己と他者が互いを鏡として捉え循環していく関係というのは、社会の様々なことを自分事として考えられる視点や共感性を育み、温かい社会につながっていくように思える。そこからコミュニティが成熟したり、群れとしての社会学習機能が高まっていくのかもしれない。そのために必要な環境が何なのかはまだ行き着かないが、そのような社会を目指していけるデザインができれば凄く素敵だと思う。

（今泉委員）

・どう生きるかという観点で、何か道具を使ってピアノが上手になる、自転車が上手に乗れるというレベルから、学びの目的そのものが変わっていくと、生き方も広がっていくということなのだと思う。（榎委員）

・戦後、教科として社会科という名称が生まれたが、当時は社会という言葉が世間に馴染みがなく、社会教育法によって社会教育という名称が生まれてからも、あまりよく分からぬまま今に至っていると思う。そういう意味では、大切な部分をどう言い表すかはさておき、その大切な部分をじっくり考えていくという教育の本質があるのだと思う。（片岡副議長）

・ある定時制高校の授業に行く機会があったのだが、中学校で不登校になり高校で学び始める際に、それまで学ぶ習慣がなかったため、20歳以上になってから学びを再発見していることがある。そういう意味では学校教育の中にも生涯学習的なものがあるともいえる。誰かのために一生懸命頑張るということは学校教育の文脈でもありえるが、これについてはあまり学校教育・社会教育の分類にこだわらなくて良いと思う。ただ今はその考えが形になっていないこともあり、在り方の議論となってしまう。トライアンドエラーを繰り返し、それを共有していく流れがあればいいが、人々は定義づけを求めてしまう。モチベーションを大事にして、先人が積み重ねてきたものを引き継いでいくというバトンのようなイメージで出来ると良いと思う。（片岡副議長）

・自分も通信制で不登校の生徒が多い学校に関わっているが、学ぶというエネルギーのない時代を過ごしていたため、少し安心できる環境で高校デビュー、いわゆるリア充のような体験をすると、毎日学校に来る、学ぶ、レポートを書くということができるようになっていく。仲間づくりから、モチベーションやエネルギー、自己肯定感が湧いてくることで学びにつながり、成長が促進される。その上で成果発揮のための必要な環境を考えると、土台として人と人がつながりやすい環境を整備するというところも一つあると思う。（今泉委員）

・工業高校の定時制で電気分野や鉄道分野に触れ、ハマっていくこともあると聞く。そういうものが提供できる場であれば、学校に限定せずともいいように思う。学びのスタートが16歳であったり、そもそも社会教育からスタートするのも一つ。質が満点である必要はなく、その人なりに積み重ねることが自己肯定感にもつながる。学んでいないことを恥ずかしく思う高校生もいると聞くので、色々なところで支えるのが大切だと思う。公民館を始めどこからでもスタートして、色々なものを媒介しながら学んでいって、それがいずれ自分のため、他人のためにつながっていくと理想的かもしれない。まずは、その人が自分で学びたいという気持ちを後押ししてあげるような仕組みができるといいと思う。（片岡副議長）

・生徒が「なんでそれを勉強しなきゃいけないんだ。」という話があると思うが、近年は結局、個人がどれだけ稼ぐかに主眼が置かれているような気がしている。学ぶということは、まず社会全体として、個人のためだけに行うものではないということが浸透していないかないと、ずっと学び続けるということが、中々動機として出てこないように感じている。PTA活動は子どものために保護者が学ぶものと説明する事が多いが、「別に自分が学ばなくても大丈夫」という反応もある。全体で子どもたちを育てるための学びであって、社会を作っていくためのものだと思うので、そういうマインドが伝播してほしいと考えている。（高原委員）

・学者の苅谷剛彦氏が自身の論文の中で『学習資本主義社会の到来？』という形で言及していることであるが、学ばないと稼げない、学びのレースに乗らないと生きていけないという人が出てきている現状で、学び続けることは礼賛すべきである一方、学べない人も出てきている状況と矛盾が生じることに言及している。基本的に学び続けることは大事であるが、あくまでも学びは自分だけでなく誰かのためでもあるということ。稼ぐために勉強することを否定はしないが、両方がうまく協働しながら学んでくれればいいと思う。（片岡副議長）

- ・モチベーションとして、稼げる分野のために学ぶとするとその分野に皆が集中するため、社会として成り立つかというと、そういうわけではないと思う。多様な学びの影響を受けた集団として考えると、様々な分野に特化している人がいる形で成立するものだと思う。（高原委員）
- ・お金を稼いで、それを然るべきところに寄付して貢献するというやり方もある。そのように自分の中で落とし所を見つける人もいると思う。（片岡副議長）
- ・人とつながるために何をするかと考えた時に、他者に対する尊敬の念が大事になると思う。そう考えると、他者への尊敬という人権学習のようなものがベースの学問になることで、生涯学習が成り立つのだと思う。個人を分断するための学びからつながるための学びへ、転換する必要がある。（榎委員）
- ・地下鉄の夜勤やJRの整備、新札幌駅の除雪ボランティア等、そういった仕事は大変だと思う。日常的に見ている世界は当たり前のものではなくて、見えないところで働く人がいるということを学生に伝えたいと考えている。そういう視点で考えるのも一つかもしれない。（片岡副議長）
- ・そこにいることで安心できる、そこには自分の仲間がいる、その場に継続性があるという点が、つながりやすい環境としてのトピックになると思う。自分は仕事の関係で傷つき体験の多い人と関わることが多く、育ちの際のトラウマがあるお母さんが改善・回復をしていった時に、自分の経験を生かす仕事をしたいというモチベーションが出てきたことがある。これまで過去を見ていたところから未来を見据えて学びたいという姿勢になった。また、十代で出産を経験した女性の場合は、出産後少し落ち着いた時に高卒認定を取りたいと言って、無事取得できた。やはり、やり直しができる環境や傷つきを回復できる環境を整備することで、成果発揮にもつながるのではないかと思う。（今泉委員）
- ・そういう意味では、学ぶことが誰かのためになるとともに、自分を見つめ直すことにもなる。自分の歩みを対象化して、そこからもう一步前に進むこともあるかもしれない。（片岡副議長）
- ・成果発表という考えは上位概念のような感覚であって、様々なことを達成したい人が更に行うものだけれども、そのためのベースを整えるという環境として整備していくことも考えられる。（今泉委員）
- ・もしかすると、これはより本質的な方向に深掘りを行う議論なのかもしれない。（榎委員）
- ・教育として行われることは基本的に見えにくい。学校教育も社会教育もその基本はやはり見えにくい部分にあるため、そのような上位概念への取組のような上澄みの部分も大事だとは思うが、家庭や学校の教室だけでなく全体のことを考えられればいいと思う。皆敵を作り、学校の責任だというように原因を追及したくなることは、一面としてあるかもしれないが、それを言ったとしても未来の教育につながらなければ意味がなくなってしまう。（片岡副議長）
- ・他者の責任を追及するという部分は、個人主義が先鋭化しているのだと思う。成果発揮という意味では、コミュニティでいうと、同じことを学ぶ人が仲間として閉鎖的になっている部分があるように感じる。団体間、地域間、世代間でもっと交流できるような場があるといいと思う。（高原委員）
- ・自分と違う職種の方と話す機会という点で、父母懇談会で色々な方と話していると、面白い仕事がたくさんあると感じる。自分にはないものであるため、ネットで調べるより面白く思う。（片岡副議長）
- ・同質の集まりよりも、多様な人の集まりの方が色々と学ぶことは多い気がしている。（高原委員）

・オフ会、推し活のように共通の趣味をきっかけにSNSで知り合って、実際に現場で会うように、色んな集まりの形があるのは凄いと思う。SNS経由だとしても、最後は人間らしいつながりに発展すれば、実際の活動が否定されないと思う。SNSだけだと、実際の活動に発展せずバーチャル上で全て完結してしまうので、最後は実際の人間につながってほしいと思う。 (片岡副議長)

・札幌市ならではの学びという点でいうと、豊平町や定山渓鉄道、月寒あんぱんのように、大きい街だからこそその歴史や区ごとの多様性、そういったことを歴史と絡めて学ぶのも面白いと思う。 (片岡副議長)

・学びの手段に関わる話になるが、現代では学べるものが多く、何でもオンラインや動画で目にできるため、一定の効果もあるとは思う。しかし、やはりディスカッションしなければ学びは中々深まらないように感じる。受け身でいるだけでは不十分ではないかと思う。 (高原委員)

・同じ意見をもつ人はお互いに納得して済ませがちであるが、やはり違う意見もあった方がいい。そして自分と異なる意見が論理的に分かるようになれば、理想的だと思う。学生も、サークルで集まっているところから社会に出ると、様々な意見をもつ人に会って驚くことが多いと聞く。 (片岡副議長)

・携帯で動画を見ると、その履歴から似たようなものがお薦めとして表示されやすくなる。学びの視点だと、それは考え方の偏りを増幅させているようにも見える。 (高原委員)

・好きな内容を好きなYoutuberの動画で見るということもあると思う。

(片岡副議長)

・ただやはり、一つの視点だけでなくその他の意見も取り入れるということかと思う。他者の意見も尊重するような姿勢も学ぶ必要がある。 (高原委員)

・先日アメリカのニュースで目にしたのが、アメリカの政治に賛成する団体の若者が、異なる意見も含めて様々な意見を募集するという動画を発信したもの。意見が異なることを否定せず、例えぶつかっても話す場を用意することで、少しでもアメリカの分断を和らげようとしている。若い人の力は凄いと感じる。 (片岡副議長)

・戦前の社会教育が意見統制となっていた状況が、今になって反面教師として影響していくということだと思う。 (今泉委員)

・初めに、自分の好きなことを学びたいという原点があって、そこに行行政が良い意味で関与しないというのが出発点だと思う。つまり、社会教育主事のような専門家が助言はするものの、何かを教えるということではなく、あくまでも機会の提供に留める。だが今は学び方も多様であり、学ぶ機会がそもそも失われてしまうこともあると考えると、スタート地点に行くまでであったり、そこから軌道に乗せるのは、「誰かと一緒に学ぼう」というような行政による呼びかけもまた必要なかも知れない。 (片岡副議長)

・先日、学会に出席した際に感じたこととして、学会も皆がそれぞれ学んできたことの成果発表であったり、意見交換を経て、またこれから頑張ろうというエネルギーを得られるものであったと感じた。児童福祉の分野は広いものではないが、全国で自分と同じように活動している人々と交流できることが、自分のモチベーション維持にもなったことを考えると、人と交流し学び合う環境がいいのだと思う。仲間がいて一緒に取り組める、話ができるという機会がモチベーションや成果発表につながっていく。 (今泉委員)

・人と交流することで疲れる人もいるため、そのつながりはその人が自分の状況に応じて活用し、自分で学ぶ時間もあっていいと思う。ただ、学ぼうとした時には誰かがいてくれて、つながれるのが理想的かもしれない。 (片岡副議長)

- ・学会は、先生方や研究者のためのものという印象があるが、もっと一般に広まつてもよいのではないか。（高原委員）
- ・今、札幌市の高校では課題探究的な学習の一環で高校生がプレゼンテーション大会という場での発表を行っており、凄く良い活動だと思っている。他にも、学校で子どもたちが作成したものをコーポさっぽろに掲示するなど様々な取組があるが、あれらの取組を生かした仕掛けが色々とあり得ると思う。（片岡副議長）
- ・視点を変えると、市民が誰でも発表できる市民学会のような、様々なことができるようになる。（榎委員）
- ・PTAでは研究大会を実施しており、個人的には学会と同じように捉えているが、「何でPTAが研究大会をやるのか」と理解されないことが多い。（高原委員）
- ・当事者研究として、自身の困りごとを言葉にして発信することは大事。一人一人が本にして発表したり、SNSで投稿しているところに語るべき何かがあるのかもしれない。（片岡副議長）
- ・保護者は常に子育ての研究者だと思っている。子育ての中で、家で実践を繰り返し試行錯誤している。それをどこかで発表・共有して情報交換を行い、また家に持ち帰って実践をするということの繰り返しだと感じる。（高原委員）
- ・試行錯誤研究会のような、子育てはその最たるものだと思う。（片岡副議長）
- ・答えがわからない状態で手探りで進んでいくところも共通していると思う。（高原委員）
- ・仲間がいるところが頑張れるものもある。（今泉委員）
- ・学ぶことが難しくなると、簡単に辿り着ける極端な答えに向かってしまうこともあると思うので、とりあえず聞いてみようと思える人がいればいいと思う。（片岡副議長）

ウ 各班からの発表

（ア）出口議長班

- ・こちらは、社会参画ができる人を増やすというテーマで協議した。

市民カレッジのような生涯学習施設で学んだ一部の人々だけではなく、全世代の人々が学んだことを発揮できる場づくりのために、茶話会のような自分の課題を緩やかに話せる場所が必要だと思われる。

自分が興味のあることに関して積極的にアンテナを張り、活動に参加することで同じ意見をもった同志と出会い、そこを居場所とすることもできる。また、何かをやってみようと思った時に、より多くの仲間と協力できる上、そのつながりがやがて課題解決のためのアクションにも発展し得るものと考えられる。

けれども、自分一人で抱え込んでしまい発信できなかつたり、他人を待つてしまっている人が多いという現状があるため、まずはハブとなる集まりを作る。そして、SNSのような多くの方が見ている媒体を活用し、情報を発信することによって人のつながりをより広げられるものと思われる。クラウド公民館のように色々な地域からオンラインで参加できるような手法も一例として出たところ。

現代社会においては、自分のために動くのが精一杯という人が多い印象だが、子どもの時に周囲の大人から何らかの経験を得ている人が、成長すると誰かのために動くようになるということもあるため、子どもの頃の経験が大切であると考えられる。しかし、子どもの経験を促すためには、親が体験の場に子どもを連れて行かなければその機会を得ることすらできないため、親がそもそも魅力的と感じられるような場を設けていくことが大切であるとともに、それは子どものためにもなるという理念が十分に伝わるようにしていくことが必要である。

そして、そのような場が、子どもも大人も交流し気持ちの交換などができる場、開かれた社会教育の場となるよう運営していくことが、子どもにとっての恩が生まれ、その恩を返す場所づくりにもつながっていくのではないかと考えられる。（桑原委員）

・子どもの時に周囲の人にお世話になったこと、被災時にボランティアに助けてもらったこと、そういったことから恩返ししたいという気持ちが生まれると思う。だから様々な体験を経て社会活動をやってみようという流れが生まれてくるのだと思う。そのため、子どもの時の活動・経験というのがとても大事である。

地域学校協働活動を始め、地域の人々と子どもたちをどのように引き合わせるかということが、やはり大切だと思われる。

今回のテーマは生涯学習の成果に関わるものであるため、必ずしも市民カレッジを受けた人々に拘らず考えたところ。大学で学んだものをもって人の役に立ちたいと思い、ボランティアをすることも成果を生かすという見方になるため、発揮の場面を広く捉え協議した。NPO活動に着目し、それを始めるきっかけや気持ちに至るにはどういう流れがあるのか、という視点から協議を始めた次第である。（出口議長）

（イ）片岡副議長班

・まず、成果発表の機会を整備すると考えたときに、成果を発表するのであれば、プレゼンテーション大会や暗唱大会等が挙げられるが、それだけでいいのだろうかという問い合わせから考えたところ。自分のためであると同時に誰かのためになるという循環があつたり、それまで傷ついてきた子どもたちが学ぶことで、自分の本来学びたかったことを取り戻したり、自らの尊厳の回復へつながるような循環が生まれる。学びの中で社会とのつながりを認識したり、誰かのために何かを教えてあげたくなったり、色んなことにつながっていく。何か資格を取ろうとした時、その資格について学ぶだけではなく、その過程でつながった人からまた別のこと学ぶように、余波が広がっていけばいいということで、色んなつながりが可視化され広がっていくような取組が札幌の中にあればいいのではないかと思う。学ぶことで誰かのためになるということが大事で、色んなことをきっかけにその人が自己実現できるように学んでいったり、個人の分断という視点では、グループを作るなどして開放的なつながりを作ることができればいいと思う。どういうふうに自分たちのコミュニティを開きながら、異論は異論として認めつつ討議をしていくのか、ということを考えられればいいと思う。そういう意味では、素地として人間とは何かという問い合わせが大事になる。行政としては、市民にも分かりやすい成果の発信という面を出さなければならない部分はあると思うが、市民も、自分たちが社会に生きるとは何かということを考える方向になっていけばいいと考えている。こうした二層構造をもって、最終的には一緒に頑張っていけばいいと思う。

（6）連絡事項

次回会議は令和8年1月29日（木）午後から、ちえりあ（札幌市生涯学習総合センター）で開催する。現時点では、「ちえりあでの学習現場視察」、「指定管理者『札幌市生涯学習振興財団』による事業説明」、「現行の第3次札幌市生涯学習推進構想の令和6年度実施状況に関する事務局説明」、「令和7年10月に実施した生涯学習に係る市民アンケートに関する事務局説明」、「熟議『3次構想の現状と課題の検証』」を予定している。時程等の詳細については、追って事務局より連絡する。